

靖国神社に参拝する意味

廣田 頼道

小泉総理大臣が靖国神社に参拝する事で、東南アジア、取り分け中国との関係悪化が進んでいると、再三ニュースで報じられ、評論家の類も、マスコミを通じて色々な考えを出している。又、国民へのアンケートも新聞等で、伝えられている。

- ① 絶対に参拝すべきだ。
 - ② 参拝すべきだ。
 - ③ 絶対に参拝すべきでない。
 - ④ 参拝すべきでない。
 - ⑤ 分からない。
- の内容で、現在の所①②の合計と③④の合計が半々の様な状態であります。

①と②の意見の内容は、戦争で亡くなった者に対して、国を代表する総理大臣が参拝するのは当然である。東南アジア各国に批難されるので参拝を止めるといふのはおかしい。と言う意見。

③と④の意見は、東南アジア各国との関係改善の

為止めるべき。国が特定の宗教に關係する事は、政教分離の法律に照らして問題。という内容であります。

「内政干渉だ」「日本の宗教観であつて、他国からとやかく言われる筋合いではない」「罪を憎んで人を憎まず」「不戦の誓いを新たにすることを為に行くのであつて、A級戦犯及び、戦争を美化するものではない」等々……色々な意見が交わされている。

小泉総理大臣始め、各省庁の大臣、世の中に名を示している学者・評論家に至るまで、つくづく日本人の宗教感覚は底の浅い愚劣なものだなあと思うのであります。

そもそも靖国神社とは、

一八六九年東京招魂社（招魂社）として創建されました。社地は大村益次郎の選定による。大村益次郎は、一八五三年（嘉永六年）以降の、天皇方で殉難した人達の霊を祀る所を必要として、九段下に定めたのであります。

一八七九年別格官弊社とし、靖国神社と称する。

一九三八年内務省令により、国事及び殉難者を祀つた神社、招魂社を一九三九年護国神社と改称。靖国神社も招魂社の一つであつたにもかかわらず、護国神社と改称しなかつた。

右の内容は、手元にある電子辞書の「広辞苑」「マイペディア百科事典」から引用したもので、特別専門的なものではない一般的な靖国神社のいわれであります。

つまり靖国神社は明治政府が確立される迄に起つた数々の内戦（一番大きいものは戊辰戦争）の戦死者を幕府側ではなく、天皇側、明治政府側に立つて選別し祀ることを目的にして造られた神社なのであります。ですから靖国神社には、新撰組も、西郷隆盛、榎本武揚、会津の白虎隊も、反政府軍、賊軍（敵）とされ、祀られていないのであります。小泉総理大臣の云う「罪を憎んで人を憎まず」の神社ではなく、不戦の誓いを新たにするにふさわしく無い場所なのであります。自軍の功労だけを賞賛する、極めて狭い民族主義の官軍神社なのであります。

私達は日本史、世界史の長い時間を振り返つた時

に、数々の自国民同士の殺し合い、他国民との殺し合いの悲惨さ無残さ空しさ愚かさを学ぶ事が出来ません。勝者が正義だととても考えられない事実が沢山あります。無駄死に・犬死に・時代に翻弄された死・価値観の違いについて行けない憤死、これらの捨て石の死を決して軽んじ、あざ笑うのでなく、そこからたくさんの事を学び、自分達の人生や社会の未来に生かしていかなければいけないのであります。

法華経は順縁・逆縁の差別、区別を撤廃した一切衆生成仏を説く唯一の教えであります。靖国神社は到底そこまで深い教えと、性格を持った神社ではないのであります。官軍についた武士、戦争に赴いた兵隊だけが英霊となり祭り上げられ、それで本人達は浮かばれるでしょうか。

どんな戦争でも、兵隊だけでする戦争はありません。東京大空襲では十万人の人間が業火に焼かれ死にました。広島原爆投下では二十六万人の死傷者。長崎原爆投下では十五万人の死傷者。子供・女性・老人・一般市民が閃光で骨も残さず蒸発するように亡くなつていった人達があるのであります。

小泉総理大臣が靖国神社に参拝する事で、日本人

の宗教観、信仰観を代表して表現しているように、内外共に受け取られては、的外れであり、大迷惑であります。信仰とは国や、会社等の団体でするものではなく、あくまでも一人一人の心から湧き出るものなのであります。靖国神社等に公人として肩書きを担いで参拝することは、信仰の基本が判つてないのであります。かつて、西武のオーナーが自分の父の墓に従業員を参らせ、墓守をさせていたことも、同様の愚の骨頂で、信仰する者のすべき事ではない、邪道なのであります。かつて、官房長官の私的懇談会は、小泉政権下において、靖国神社に代わる無宗教の国立慰霊施設の建立を提言しているものであります。広島や長崎、沖縄にあるような、慰霊施設を、恩讐を越えて、敵国の捕虜として、日本の収容所で亡くなつた人達も、一般の市民も、兵隊も、全て平等に慰霊出来る国立の施設が必要なのであります。

信仰の違い、信条の違いから、靖国神社に合祀しないでくれと訴える人々と裁判を起こしてまで、それを拒否、横暴な御上の威光を正義面で主張する靖国神社にも、本当の慰霊の慈悲心は無いのであります。

東南アジアの各国が不快感を示すから止めるべきだではなく、日本人全般の宗教感覚が総理大臣を筆頭に幼稚であり、慰霊の本質を真剣に考えようという気持ちが無いのであります。そもそも靖国神社とはどういう内容のものなのかという所から、辞書を引いて考えるだけでも、本質の概略に迫る事ができるのであります。

靖国神社の関係者の方は「戦後止むを得ず一宗教法人になつていますが、明治天皇の思召しとして創建されたその主旨を体し、今も神社の国家的性格が不変である」(社報『靖国』平成十六年十一月号)等という考え方を本音に抱き続けています。こうした、御上の威光を傘に着的考え方は信仰などでない事に目覚めなくてはいけないのであります。靖国神社は国民と兵隊を鼓舞し戦争を美化して来ました。国民は敗戦によつて経験した塗炭の苦しみの中から、戦争には勝者も敗者もなく、全てが敗者であり、戦争によつて絶対に平和を得る事は出来ない事を正直な実感として学んで来た。それに対して、靖国神社は同じ歩みで反省懺悔のメッセージを世界に発信し続けているだろうか。我々国民には、まったく伝わら

てこない。

信仰は、公人として、国を代表して、国の税金、他人のお金を使って行うものではない。まして、御上の威光によつて強制的に認めさせるようなものでもない。公人の肩書きを外して、私人として、一人の人間として心を裸にして合掌するものであります。どの様な思惑なのか、理由は何であれ、他国の人が批判する以前に、この国を構成している我々一人一人が、正しく、亡くなった人々の慰霊と一切衆生成仏を願うには、どのような道理をふまえた法でなければいけないのかを真剣に考えなければいけないのであります。

いつまでも外圧に右往左往するばかりでなく、己の心の内圧を起こさなければいけない時代を迎えているのではないだろうか。

事の本質は、参拝するか、しないかの問題ではなく、まず、その神社仏閣が何を目的にし、どういう内容の教えを根本としているのかを考えなければいけないのであります。

それが、全ての宗教の基軸【依法不依人】なのであります。